知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【開催日時】平成２４年１０月１６日（火）
１３時３０分～１５時３０分

【会　　場】下田市民文化会館　小ホール

１　出席者

・発言者　下田市及び南伊豆町において様々な分野で活躍されている方６名
（男性３名、女性３名）

・傍聴者　１１３人

２　発言意見

	項　　目	頁数
発言者１	まちづくりは人づくり	3
2	第一次産業の支援 伊豆を県の観光の主役に	5
3	ジオパークや地場産品など地域資源を活用した菓子等の開発	11
4	下田の魅力をフリーペーパーやリーフレットで発信 南豆製氷所の保存	13
5	地域の中に子どもを育てる場所を 子どもたちそれぞれの芽を伸ばす下田高校に 原発の再稼動を問う県民投票の実施 農作物の鳥獣被害対策	20
6	東北に河津桜を植える「伊豆から桜プロジェクト」の実施	23
傍聴者１	伊豆縦貫自動車道のルート変更	30
2	オレンジビーチライン、富士ビュービーチラインの実現	31
3	公害紛争処理（西伊豆町の騒音問題）	31

＜知事挨拶＞

皆様、こんにちは。県知事の川勝平太でございます。

今日はこの下田、南伊豆の皆様方と直接お話しする機会を得られまして、大変喜んでおります。そして下田市長の楠山先生、また南伊豆町長の鈴木先生、お忙しい中来ていただきまして、ありがとうございます。

この知事広聴というのは、広く聴くということでございまして、この地域のリーダーの方々に御発言をいただいて、それをしっかり聴く。それから今日、平日の午後ということで、何かと御多忙の中来ていらっしゃるので、フロアーの皆様からも御発言をいただくことにしております。お聴きしたことは、すぐこの場でお答えできないものにつきましても、必ずお答えをいたしまして、政策に反映していくというようにしてまいります。

これまでこの知事広聴は、今回を入れて 23 回目です。35 市町のうち、今回で 31 市町を回りまして、残されているのは熱海、伊東と函南、三島ということになりました。一方、この知事広聴と併せまして現在移動知事室というのをやっております。移動知事室というのは、文字どおり知事室の場所を移すということで、目下の知事室は、下田総合庁舎３階の賀茂地域政策局長室が私の知事室ということになっているわけでございます。

この移動知事室というのは、知事になってもう３年余りになりますけれども、この間、ともかくそれぞれの現場に出かけてまいりまして、その現場でその問題を直に見て、関係者に直にお話を聞いて、解決の方向性について合意を得て、そしてその方向に向かって走ると。なるべく早く問題を解決して、善は急げということでやってきております。

しかし何といっても静岡県は狭いようで広うございます。何しろ湖西市から小山町までありますし、そしてこういう石廊崎の近くまで来るとか、あるいは水窪まで行くとか、井川まで行くとなりますと、そこに行って仕事をして、数時間でもう日が暮れるから帰るということになりまして、もう後ろ髪を引かれる思いのことがよくございまして、こうした現場に出かけた回数は公式だけで、もう 1,000 回近くになっております。

しかし限界があるということで、知事室それ自体を移すということを心掛けまして、今年の初めに富士市で始めました。それで、そして夜になりますと、ある意味で夜は長いということで、そのまちの方と徹底的に話をするということができますし、朝は一番に起きて、通勤あるいは通学の電車に乗って、その現場を見ることができるということで、これがなるほどいいということになりまして、それでこの移動知事室というのを始めまして、これで４回目です。今移動知事室がこの下田の総合庁舎の中に置かれているということで

ございます。

今日もこちらに宿泊いたしまして、明日南伊豆から西伊豆の方を経て、夕方に静岡の方に戻ると。実際は昨日からこちらの方に泊まっているわけです。実は昨日熱海から始めまして、この美しいオレンジの木々を見ながらビーチの美しさ、これを堪能してこちらに下りてきました。オレンジビーチラインとでもいった感じですね。サワーオレンジのワインなどもこちらでいただきますと、やっぱり作っているところでいただくと、すごくおいしいということもございまして、135 号線などという味気のない名前よりも、オレンジビーチラインの方がいいんじゃないかと。伊豆スカイラインがありますでしょう。スカイラインがあってビーチラインがあると。そこの南伊豆の頂上から、ある方が富士山が見られるという写真を撮りました。ただ南伊豆をぐるっと回れば、石廊崎をぐるっと回れば富士山が見える。富士を見る「富士ビュービーチライン」。136 号線なんて覚えられないですよ。

それぞれ風景を上手に生かしたこの海岸線もそういうふうに呼べば、何となく津波の話だけで皆怖がっておりますけれども、そうした危機に対処することも大切でございますけれども、一方でこれの持っている良さ、「海と山のあらゆる風景の画廊である」というように言ったのは川端康成さんです。「伊豆は詩（うた）の国であり、伊豆は日本歴史の縮図であり、伊豆は南の国のモデルである。そしてまたその海と山のあらゆる風景の画廊である。」そして最後に彼は「伊豆半島は一つの大きな公園である」と昭和６年に言っています。芸術家の直感ですね。それが今やジオパークになりました。文字どおり公園になりました。そういう地球の造山運動がつくり上げた最高傑作の一つでございます。

しかし、そこにも問題があるということで、今日は６人のそれぞれ下田、南伊豆の方たちからじっくりお話を聴きまして、皆様方にもお聴き賜って、そして問題点を共有して、こちらの地域の発展のために尽くしてまいりたいと思っております。少し長い時間になりますけれども、どうぞお付き合いくださいますようにお願いを申し上げまして、冒頭の御挨拶とします。どうぞよろしくお願いいたします。

＜発言者１＞

下田市都市計画審議会の委員をさせていただいております。よろしくお願いいたします。

都市計画云々と聞くと、ちょっと固いかもしれませんが、審議会の方には私一市民として参加をさせていただいております。まちのことというのは、人づくりということでいつも私はとらえております。この人づくりというのはとても難しいことだと思いますが、子

どもを育てるという親の気持ちとなれば、それがイコール人づくりとなると思いますので、まちも、それから県も、親の気持ちとなっていただき、子ども育てるという形をとっていただければ、自然にいいまちができるんではないかと思っております。何かを作るとか、何かをというよりも、人の中身を育てていってあげればと思っております。

私の仕事に関連してなんですが、今日も魚市場見学に小学生を引率して、キンメダイの仕分けの見学などにも行ってきました。これは東京の子どもさんと行ってきたんですけれども、地元の小学生のお子さんのこういう見学は一時的なもので終わってしまうと思います。１泊とか２泊をして宿泊体験をして、近くの、例えば下田と南伊豆、それから下田と静岡の、浜松の方でもよろしいですよね、そちらの方のお子さんたちと交流をする。静岡県を知るというか、お互いのまちを知るという交流をしていただければ、とってもいいことになるんじゃないかなって思っております。また知事さんのお考えを後でお伺いしたいと思います。

それについて、子どもさんが学ぶということは、親もその子どもが学んできたことをお話ししてもらえれば、親も興味を持って、私たちも泊まってみようかなとか、交流してみようかなという話になると思いますので、それぞれの地域の特徴だとか、それから観光ですとか、そういうのを学び合ういいきっかけになるんじゃないかなと思います。

例えば温泉地に住んでいましても、会場に来ている方にもちょっと伺いたいんですが、温泉にいつも入られているという方いらっしゃいますか。たまに入る方もいらっしゃいますが、なかなか温泉に行くということが、それも観光の方が入る温泉にはなかなか行かないかなと思うんですね。

ですので、海水浴もしかりだと思います。私も今年も海に入らないで夏を終えてしまったということで、観光で来ている方に、「海はいいよ、温泉がいいよ」とお話しする前に、自分たちがそこでその季節を感じて、「とてもいいから皆さん来てください」というお話ができるような教育というか、人づくりをしていただけたらと思います。

なかなか忙しい中でそういう機会をつくるのは難しいですが、県の取組とか、それからまちの取組にそういうことがあれば、あっ、じゃあ参加してみよう、たまには行ってみようという発想の転換になります。おいしいものを食べたら、今日こういうおいしいものを食べてきたよとお話ししたくなると思いますので、ぜひいいところに行って、いいものをというのもわかりますが、地元のいいことを知ってお知らせする住民になりたいなと常々思っております。それで観光に来た方に一生の思い出になるこの土地というのを持って帰

っていただきたいなと、いつも胸に秘めて接しておりますので、できればそういう事業とか、企画を立てていただければと思って、この場所に参りました。ですので、まちづくりは人づくりということでお話をさせていただきました。

＜発言者２＞

皆さん、こんにちは。私は水産会社の経営のほか、下田でＮＰＯの副代表ということも15 年以上させていただきまして、商工会議所の方では青年部長という形で、そんな年ではないんですが、そういう役もやらせていただいております。

私の発言に求められるものは多分水産業だとか農業だとか、１次産業の関連のことなのかなと思いますけれども、やはりそこに入る前に、先ほど発言者１さんがおっしゃったように、やっぱりまちというのはどういうものが必要なのかというところから、その１次産業、３次産業というその辺の部分が必要なのではないかなということを話させていただきたいなと思います。

やはり下田は今、楠山市長がＰＲしているように『キンメダイのまち』としてやっと全国に名を馳せるようになりました。しかしそれができるまでには当時 2000 年前後、伊豆新世紀創造祭というのがありまして、その時代のときからキンメダイを持ち上げようというところから活動が始まっております。それから考えますと、はや 15 年が経過しているということで、それぐらいやるとキンメダイというものが日の目を見るようになりました。今どこのホテル、旅館さん、観光地等の伊豆の施設に行っても、キンメダイを取り上げた料理を提供するというような形にやっとなりつつあるということです。

当時、我々が取り組んだときには、気仙沼だとか、あちらのサンマだとか、北海道は何だとかということをいろいろ独自の食材でというようなことを考えていました。しかし、それが現実になるのは約 15 年ぐらいはかかってしまっているなというように感じております。

今現在、キンメダイがどうなのかという状況を考えますと、いろんな船の問題、船の死亡事故だとかいろんな問題がありまして、キンメダイの魚価は上がっているんですが、水揚げ高は減っています。ということは需要は伸びているんですけれども、やはり水揚げ量が減ってしまっているというのが今の下田の現状です。

そういったことを踏まえていきますと、やっぱり需要と供給のバランスというのは、特に農業、水産業というものに対しては非常に敏感に反応してしまうというようなことがあ

ります。このエリアはやはり流動人口がたくさん流れてきて、そこで消費して経済を活性化していくというこの構造は全く、多分今後も、今の現状から考えると変えられない状態にあると思います。

そしてそういったことをどういう取組をもってこれからしていくのかな、どういう方法がいいのかなというのを常々いろいろ考えておるんですが、今やはり静岡県の方では、６次産業化という言葉がいろんな場面で語られまして、いろんな形で表現されています。６次産業って何なのかなって我々もいろいろ細かく考えるんですが、やっぱり１×２×３で６次なんですよね。ということは最初の１がなければ、２も３もなくなって６次産業というものは成り立たないんじゃないのかなというように僕は考えています。

その１というのは何かというと、やっぱり我々業界でいいますと漁師さんであったり、魚を採っている人たちだったり、定置網をやってくれている人たちだったりというそこがないと何の産物もつくれない。また農業に例えますと、露地の栽培でも、ワサビでもシイタケでも、伊豆の特産物のミカンでも、それを作ってくれる方々がいないと、やはり２、３、そこに産物が生まれて、今観光のキーワードとしていろいろ語られている食が生まれてくるのかということになってくると思います。

ですから今のいろんなことを考えますと、僕が一番本当にお願いしたいことは、１次産業というものにもう少し脚光を浴びせていただきまして、それに関連して２、３が絡んで６次産業ができている。特にこの伊豆地域、南伊豆地域は食材としてまだ日の目を見ていないいいものがたくさんあると思います。そこにどういう関連を設けて、どういうふうに表ステージに出していくのか。キンメを出すのに 15 年かかっているわけです。そういう時間だと、やはりまちの衰退の時間の方が早くて、なかなかそこに付いていけないというのが現状じゃないかなと考えておりますので、そこをスピード化して、何とか表舞台に出していくというような構図を、やはり県の行政の力を借りたり、いろんな指導を借りたりしてやっていかなければと思います。

私ごとになりますけれども、県の方では「ふじのくに食と農の健康フェア」だとか、「食材の王国」だとか、いろんなものでＰＲをしていただいております。静岡県のブースをいろんなイベントで作っていただいているんですけれども、担当者とお話ししたときには、「なかなか東部の方々は出てこないんですよ」って言われました。

この地域はそういう産物を、要するに製造するという製造業というものはなかなか発達していないというのは、この地域には特徴としてありまして、いいものが採れるものです

から、そのまま首都圏に運んでしまえば、そこを改良したり、作ったりしなくても商品になってしまったという時代がずっとあったものですから、なかなか自分たちで作って、違うものに付加価値を付けて出していくというような構図がなかったように思われます。

ですからそういった部分においても、やはりいろんな出先機関のお力を借りまして、商品化のスピードアップだとか、ＰＲ効果、そういったものをこの地域で作っていくことによって、それが食というテーマとして今後の観光に生かしていって、観光の交流人口がまた南伊豆地域に戻っていただいて、地域経済の活性化につながっていけばというふうに考えているのが私の意見です。

ですからやっぱり１×２×３、その最初の１をもっと力を入れて補助していただくなり、いろんな支援をしていただくなり、指導をいただくなりして、やはりもっと強固なものにこの地域の産物をしていただきたいというように、私はこの場をお借りしましてお願いしたいと思います。

最後になりますけれども、やはり静岡県の観光の主役は、何とか伊豆地域に持っていきたいと思っています。静岡の観光の主役はやっぱりこの南伊豆地域であると。何かあるごとにやはりステージの中央に立つのは、大変申し訳ないんですけれども、浜名湖ではなくて伊豆半島であってほしいということをこの場でお願いいたしまして、私の発言とさせていただきます。ありがとうございます。

＜発言者１、発言者２に対する知事のコメント＞

発言者１さんと発言者２さんの方から大変興味深いお話をいただきまして、またためになりました。特に発言者１さんが「まちづくりは人づくりである」と、これはもう名言であるというふうに存じます。これは幾ら強調しても足りないと。そうした中で、人づくりの基礎は、やはり小さいときから子どもたちが見識を持ち、また経験を積ませるということで、小学生たちを魚市場、しかもこのキンメダイを処理しているところを見せるということをなさったということで、大変いい経験を子どもたちはしたというふうに存じます。

私は実は午前中、朝日小学校に参りまして、11 時から 12 時過ぎまで、小学校６年生の子どもたちと一緒に防災教育について意見を交わしていたんですけれども、そこはたまたま楠山市長さんの母校であると、しかも楠山市長さんはその第１期生であるということで、市長さん御自身も出席してくださったわけでございますが、朝日小学校は昨年の 3.11 以後、すぐに４月の下旬には防災訓練をなさって、すぐ近くにあります多景山ですね、ここに登

ろうということで、そのときには「おはしも」という標語がございまして、「押さない」の「お」、それから「は」「走らない」、それから「し」「しゃべらない」、「も」「戻らない」、この４つの「おはしも」というのを知らない子はいないわけです。これでやってみた。

そうすると、走らないわけにはいかない場面があるので、少し小走りにする必要があると思ったと。それからまたしゃべらないと言っても、１年生、２年生の低学年の子、この子たちに「頑張れ」というように声をかけるということで、全くしゃべらないというわけにもいかないことがわかったとか、そうしたことを経験を踏まえて、ビデオまで撮って、これは先生の御指導だと存じますけれども、防災先進校としての実力をいかんなく見せてくれました。そして質問も、現在の防潮堤計画はどうなっているか、避難タワーを造る気はあるのかどうか等々、実に県議会議員の先生に責め立てられる以上のパンチを受けまして、いい学校だなと思った次第なんですよ。こういう形で子どもが育っているというのは誠にすばらしい。

そして、子どもたちはどこに避難したらいいかということで、いろいろなまちのマップを作ったわけです。ここの地域は危ない、ここの地域はそれなりに一時的にはいいとか、そういうふうに４つほどの地域に分けているわけです。それは地域について理解して、できたものを今度はまちの人に見せているわけです。まちの人はそれを知らない場合があるんです。自分たちの方が知っているということになる。だからこの地域を学ぶことを通して、これは確実にそこを知っている人が小さいときから育っていると。私はそのうちに中学ぐらいになりますと敷根の方に行くでしょうから、そうするともっと海岸線だけじゃなくて、朝日小学校は標高３～４メートルのところでございます。敷根はずっと高うございますから、そことの連関も考えるようになるでしょう。

そのように、それがやがて南伊豆、あるいは河津だ、あるいは東伊豆の方向に広がって、ここの伊豆半島全体についての知識に広がるに違いない。これは促進した方がいいと。だから発言者１さんがおっしゃるように、子どもたちの交流を、学校の先生、あるいは地域の指導者たちが率先して地域を学ばせる。その前に私たち自身が学んでないとだめです。私たち自身が伊豆半島がどういうものかということを知ってないといけないと。伊豆半島全体として知っていくべきだという課題が最近突き付けられました。それは日本ジオパークに伊豆半島が認定されたことです。これが数年後には世界ジオパークになります。世界で最も美しく、かつ見ごたえのある、訪れるに値するところだと、こういうことになるわけですね。

ですから、なぜここがそういうところであるかということを説明できますかと思って、子どもたちに、何で地震や津波が起こるのか。それはプレートが動くからであると、こう来るわけですよ。おお、すごいなと。プレートってフィリピンからのプレートとユーラシアのプレートがずれてこうなるんだというようなことを言うんですね。こうなったらもう、下田は地球の半分ぐらいのユーラシアでしょう、そしてフィリピン海プレートでしょう、ものすごく大きいですよ。太平洋だけで地球の表面積の３分の１ですから、そうしたことが視野に入ってくる。そこのずれているところ、あるいは境界面のところで起こるんだということについての、まだ十分に正確でないにしても、そういう知識が今入りつつある、これはすばらしいことです。

そうしたことが正確に体系的に入りますと、世界の中の伊豆半島、今までは首都圏しか見ていない、あるいは今までは日本だけしか見ていない、これが世界の中の伊豆半島になる。世界ジオパークになるということです。そのときが来たときに何をするかといったときに、それはもちろん風景がきれいだなと、オレンジビーチライン、何ときれいなんだろうと。しかしお昼になればおなかもすくし、夜になれば、これはまたしっかりとこちらのおいしいワインであるとか、お酒であるとか、それからキンメダイも食べたいと。ああ下田と言えばキンメダイ、キンメダイの漁は日本一だということで、それは今までは向こうに売っているだけだったと。

ところが発言者２さんがこれでは余り能がないと。１×２×３で６だと。１＋２＋３も６です。だから１が欠けると、これは６次産業とは言えないと。この３つ合わせて６次産業だということで、大事なことは１次産業がしっかりしていること。しかしこれを単に首都圏に売っていただけだったけれども、それを加工したり、流通に回したり、最終的に消費者の方々のことも自分たちが頭に入れて考えようと。観光客は、全体で 1,000 万人近く伊豆半島に来られる、こちらだって 200 万人台ぐらい来られるわけですね。その人たちの夜をどうするんですか、お昼をどうするんですか、お土産をどうするんですかといったときに、それは最後の消費、つまり３次産業ということになるわけですね。そこまで入れると、釣った後はもう全部魚市場で野となれ山となれ、それなりの販売額が出てくればいいというんじゃなくて、キンメダイを入れた形での観光を推進していくべきだと。

あるいはキンメダイということで、これをここのいわばブランドにするのに 15 年もかかったとおっしゃっている。特に今年はオリンピックで金メダルを大分とったと。「キンメ樽」を差し上げようということで、何しろ楠山さん、市長になった途端に「キンメ樽」、もう全

国放送に出て、７時のニュース、９時のニュース、２回見ました。おめでとうございました。

もうこの下田の「キンメ樽」、あれ幾らぐらいかかるんですかって聞いたら、あの樽も手作りだそうで、３万円以上かかるとおっしゃっていましたね。まあしかし３万円相当で全国数千万の人に、金メダルにキンメの樽を差し上げたというこの掛け言葉で下田の名が、もうちょっと下田の名前を２～３回アナウンサーが繰り返せばと、こう思いますけれども、上がったと思いますね。

だからここでダメ押しでしっかり、７時のニュースで出たというのは大きかったと思うんですよ。だからこれを好機ととらえて、これを生かしていく必要があるということで、その採れる現場などについて、子どものときから知っておくことが大事であります。そしてそれを観光に生かしていくことが大事です。私はここは世界のジオパークになる今前夜にいますので、お越しになられた方たちに海の幸、山の幸を上手に食べさせる。

今日なんか弁当はハリス弁当と言いまして、あの総領事として赴任したハリスさんに差し上げた弁当の献立が残っているので、それを利用したハリス弁当というのが今日出まして、これも楠山市長さんが献立を考えられた。こういうふうに歴史に学びながら、そうすると一気にハリス、その前のペリー、そしてここが日米平和のシンボルだということで、日米関係がおかしくなれば、下田で会議をすれば一気によくなるというパワーを持っているわけですね。

しかし来た人にとっては、私は下田であろうと南伊豆であろうと、行政の境界なんて関係ないですから、美しいときにはゆうすげを見に行こうと、石廊崎であのダイナミックな波打ち際、そして広大な太平洋、そして絶海の孤島のような感じをさせるあの美しいリアス式のあの海岸を見れば、一生忘れないですね。

だからこうしたところを地域全体として広く行政を超えて観光に結びつけていくということが大事で、下田は下田だけで成り立っているんではないと。南伊豆は南伊豆だけで成り立っているんではないと。そして情けは人のためならずで、相手のところに連れていくことを通して、あるいは相手の人たちを入れることを通して、その地域のアイデンティティを、地域の特性を知っていくと。

そのために私は伊豆の人は伊豆から出て、伊豆以外のところで観光地として栄えている所を見に行く必要があると思います。それには一人で行かないで、仲のいいグループで行った方がいい。仕事の合間のとき、あるいはたまたま余裕ができたときに行ってみる。そ

して夜一緒にお話ししたり食事したりするときに話し合って帰ってくると、帰ってきたときに、やっぱりここがいいんじゃないのということになりますよ。ここは日本一、いや世界でトップクラスの美しい所です。

ですからジオパークになってごらんなさい。そのうち「わあわあ」と皆が言います。だけど、そのときに皆さんは外の目で見ていますから、自分たちも外の目で見ていると強いです。ですから敵を知るために、来るのを待つだけではなくて、敵陣と言うとちょっと言い方が悪いですけれども、出掛けていって初めて自分を知るということができます。そういう時期が今きつつあるなというように思います。

日本のジオパークになって、数年後には世界のジオパーク、世界の公園になる。まさに川端康成が 80 年前に言ったこと。「伊豆半島は一つの大きな公園である」というふうに『伊豆序説』の冒頭のところで述べているでしょう。これが今現実のものになりつつある。皆さんが世界を知らなくてどうしますか。そういうための今準備をする時期にきたと。世界に向けて船出すると。

今日の朝日小学校の校歌にそういうことが書いてあった。子どもたちの５年生と６年生が歌を歌ってくれましたよ。船出をしていくんだと、大海に向かってと、いいなあと思いました。ですから 33 メートルの津波のことだけで残りの人生を終えたんじゃ、1000 年に１回、来るか来ないかわからないようなものについてだけ心配していると、大事なものを見失うとも思っております。備えあれば憂いなしということで今日の朝日小学校での話し合いも終えました。そんなことでとりあえずの感想とさせていただきます。どうもありがとうございました。

＜発言者３＞

こんにちは。ジオガシ旅行団のデザイナーをやっております。お願いいたします。

南伊豆に移住してきて５年目になるんですけれども、地方にこそ、きらりと光ってすごく頑張っている人たちがたくさんいるということがわかってきて、その手助けをしたいと、それに関わらせてもらいたいと思ってやっております。ジオガシ旅行団のメンバーは、伊豆半島認定ジオガイドとデザイナーの私で構成しております。

我々の考えとしてジオガシ旅行団とは、住む人が主体となって大地の恵みを学び、楽しみ、知らせ、シェアするというジオパークの考え方をお菓子を通じて実践する団体です。伊豆半島のジオ資産を共に発掘し、それを取り巻く地域の恵みや文化を再発見、価値を認

め、知らせ、生かしていく道を探りたいと。そのために伊豆半島をはじめ、下田、それぞれのジオスポットをモチーフとした一連のお菓子シリーズを企画製造販売するほか、体験プログラムを実施するなど、ジオスポットを人が訪れて楽しむための仕組みづくりを考えています。

実際にこちらが下田の爪木崎の風景なんですけれども、このような形で風景があるんですけれども、これにそっくりな形のお菓子を作って、それを持って皆さんがこの場所に訪れたくなるような仕組みづくりというものを考えて作っております。

実際の商品がこちらになるんですけれども、こちらはお菓子がついているんですが、お菓子という枠を超えた宣伝ツールと考えてもらっていいと思います。商品のパッケージには、この後ろに風景の写真があって、それでこちらに風景そっくりに切り取ったお菓子があって、さらに実際に訪れられるように地図が入っております。

こういったように仕組みをたくさん作って、なおかつお客様が体験を通してここに興味を持ってもらえるような仕組みを考えました。ジオサイトでの関心を促すツールとして考えております。

さらに今現在あるのが、下田ですと弁天島の斜交層理パイだったり、爪木崎の柱状節理クッキー、南伊豆ですと弓ヶ浜のクッキーなどあるんですけれども、それぞれになるべく地元の地場産品を取り入れるようにしております。こちらの弓ヶ浜クッキーの方には、南伊豆のアロエが使われております。そしてこちらの爪木崎の柱状節理クッキーには、実はこれにはヒジキが入っております。そうした関係で、地域のものが具体的につながりながらＰＲできるようにというふうに考えております。

そしてこちらのジオガシ旅行団としては、さらに地元の方たちにもっと地域に関心を持ってもらいたいと思っておりまして、その見慣れた風景や日常を見直すきっかけとなればと思っております。そして地元のよさを再確認し、誇りに思ってもらうことによって、自然に人に自慢したくなる仕組みというふうに、そうした体験を提供できるようなことができるようにと、我々の方で地元の方たちを対象にジオカヤックツアーというのをこの間開催させていただきました。

地元の漁師さんしか見ることのできない海から見た伊豆半島は、ジオを語る上でも最も重要で、そしてドラマチックな景観を見せてくれます。それを見ながら伊豆半島の成り立ちや、目の前の岸壁の歴史を知った上で、そこに住んでいる楽しさにつながることが、皆さんに体験として受けてもらえたらと思って、プログラムを開催させていただきました。

こちらの方は来年以降も行っていく予定で、時間をかけてじっくりと皆さんがジオに関心を持ってもらう。ジオという自分たちの住んでいる美しさというものの理由を改めて知ってもらうということができればと思っております。

我々の今後の活動として、今このように各メディアさんに取り扱っていただいたりとか、販路も幾つか東京の方にも拡大しつつ、多くの方たちの協力のもと、やっているんですけれども、我々の方では実際に工房を持っていないので、ここからは皆さんの協力が必要となってきます。地域の地場産品を使ったお土産が、その土地その土地でできればうれしいと思っておりますので、そうした形で皆様の協力を得て、地元のお菓子屋さんとかに、こういった特産品があるんだけれども、こうしてお菓子にできないかなとか、そういったアイデアを皆さんで一緒に考えながら、新しいジオパークを世界に向けての発信へ、これからも頑張っていきたいと考えております。

＜発言者４＞

今日は『下田的遊戯』編集長ということで来させていただいているんですが、私の方はそういったフリーペーパー、タウン誌を発行するだけではなくて、いろんなことをやらせていただいています。飲食店、街中にあるんですけれども、「茶気茶気」という皆さん御存じの方もいらっしゃるかと思うんですけれども、その経営もやっていまして、タウン誌の編集、あとデザイン関連の業務などをやっているんですが、すべてに関連して下田の観光発展というものが根本にあります。

そういった中でいろいろ関わらせていただいていまして、そのまずきっかけとなったのが８年前に編集を始めましたこの『下田的遊戯』です。すみません、壇上にしかないんですけれども、こういったフリーペーパーです。ちょっと皆さんに問いかけたいんですけれども、このフリーペーパー、御存じでない方いらっしゃったら手を挙げてください。大体 20 人ぐらいですかね。ということは大体８割ぐらいの方は知っているということでいいかと思います。

８年前から始めて、今年に４回 5,000 部ずつ発行しています。これを続けさせていただいているという意図なんですけれども、私は９年前に下田に帰ってきました。もともと下田の人間です。下田に帰ってきまして、下田のまちづくりというのはどうなっているんだろうということで、いろいろ調べさせていただいたんですけれども、その当時はやはり街中はシャッター通りと言われていまして、かなり観光業も衰退をしているという話を聞く

中で、一つすごく衝撃的なエピソードがありまして、皆さん多分御存じであるペリーロードありますよね。

大正時代、明治時代の建物が並ぶ下田の街中の一番観光客が集まるスポットですけれども、そういうスポットにお客さんが行きたいと思いますよね。駅前でタクシーの運転手に「ペリーロードに行ってくれ」と言う観光客がいたそうです。それに対してタクシーの運転手が言った一言というのが、「あんなところに行っても何もないよ」という話だったんです。

これは人の価値観だと思うんですね。その運転手にとっては何もないところ、ただ観光客にとっては、こういった美しい風景を見たいというか、そういった趣味というか、そういう嗜好があったと思うんですね。多くの下田の街中に訪れる観光客というのは、ペリーロードを目指して、ペリーの来航記念碑を目指して歩いているという方がほとんどです。

そういったタクシー運転手のエピソードを聞いたりとか、あと街中の人の観光に対するイメージを聞くと、あまり下田のことをいいイメージでない方が多かったんですね。僕らが危機的に感じたのは、やはりそういった現場の状況でして、その現場の状況をどうにかできないかというように思いまして、自分が下田のことをあまり知らなかったというのもありまして、それを調べながら、いいところを、魅力を発信していこうということで、このフリーペーパーを始めたのがきっかけです。

そういった中で８年間、今現在 32 号が発行されてますが、この下田を地元の方に向けてＰＲしていったんですけれども、８年間やらせていただいたので、皆さんかなり下田のことを、今まで知らなかったことを知ることができたりとか、「意外と下田っていいところじゃないか」というふうに、前とは違ったイメージを持っていただけたと思っております。そういった御意見もいろいろ聞かせていただいております。

まずは先ほど言っていましたとおり、まちづくりは人づくり、その話もつながると思うんですけれども、やはり現場の人間が下田のことを知らない、下田の魅力を知らないということは一番問題ですので、そういったところをまず改善したいと思って、このフリーペーパーを始めました。

その後に、観光客に下田をどう伝えるかというところで考えた結果、こういった情報を集めていくと、下田の情報ってものすごくいっぱいあるんですよ。これを一つの例えば冊子にするとものすごく厚いものになってしまう。ただそれを観光客にお渡しして、自分の好きなところに行ってくださいと言われても、なかなかコース取りというのは難しくて、

皆さん迷ってしまうと思うんですね。情報が多いほど皆さん迷われる。

だったらその人のニーズに合ったものをこちら側からコースを提案できないかということで、一昨年から取り組んでいるのが「下田30カラーズプロジェクト」というプロジェクトでして、カラフルな30種類のリーフレットがありまして、これを観光客の方に好きなものをとってもらうという形にしました。皆さんは、いろんなカテゴリーがあるんですけれども、好きなものを選んで自分の好みで回る。

それはもう本当に普通の観光のスタイルだと思うんですけれども、今までのやり方ですと、やはり情報量が多いものを渡していたというのが今までの観光ＰＲのやり方だったんですね。それをいかにその人に向けた観光のニーズをつかんで、そういったものを提供していくかということがこれから大事になっていくと思います。これはアナログのリーフレットなんですけれども、これはホームページ、インターネット上でもそういった観光のリーフレットを選ぶことができるような状態に今ウエブの方を編集しております。来年にはそれができ上がる予定なんですけれども、そういったような観光対策に対して、私どもは有志と一緒になって取り組んでおります。

そういった観光のことを中心に私としては活動させていただいているんですけれども、今日何か県の方に提案できるという場を用意していただいて、何をお願いしようかなと思ったんですけれども、下田というところは恵まれていて、今若い人も、市長あたりの重鎮の方も、仲よくまちづくりをできている状態なんですね、すごくいい状態で今観光に対して皆さんで活動している状況でして、改めて県にお願いすることって何だろうと思うと、そんなにないというう れしい恵まれた状況だと僕は感じています。

いろいろ補助の方も、このプロジェクトに対しても県の方からしていただいていますので、それは十分かなと思っているんですけれども、何もないとちょっとこの場がもったいないので、一つだけ、今日少し知事とも一緒になって考えていただきたい問題がありまして、先ほどのジオパークにかかわることなんですけれども、もう８年前ぐらいからの問題でして、下田市が抱える南豆製氷所という伊豆石の蔵の保存活動についての話なんですね。この話をすると、ちょっとその問題に対して目をそむけたくなる方、結構この場にも多いかと思うんですけれども、ちょっと今日はそれを一つ取り上げたいなと思っております。

知事はちなみに南豆製氷所というのは知っていますか。今日写真を持ってきました。皆さんは御存じかと思います。これは大正期に建てられた伊豆石の製氷所です。なぜ製氷所ということか、下田はやはり漁業のまちということで、魚を運搬しなければいけない、そ

のときに氷が必要、その氷をつくるためのこういう製氷所というのがあります。

今その製氷所が解体の危機にあります。今見るとこういった形で、周りにアスファルトがありますけれども、解体の危機にあります。これが中の様子です。これ氷を作っていたプールなんですけれども、なかなか趣のある建物でして、かなり大きい建物です。この場所が国道から街中に入る入り口に、要するに玄関口に位置していまして、伊豆石のこういった大きな建物というのは、多分伊豆地域で一番大きいので、世界でも一番大きいということだと思います。こういった産業遺産なんですけれども、国の登録有形文化財にも指定されております。

その保存活動を８年前からやっているわけですけれども、なかなか話がまとまらない状況でして、ただジオパークの話の流れでも、伊豆石というのは非常に重要なコンテンツだと思います。伊東でも伊豆石の丁場を取り上げたり、最近では稲取の御石曳祭りというのも伊豆石が関係しています。江戸城の築城石として使われていた伊豆石というのは、この伊豆地域においては産業としてかなり当時活発でした。そういった流れの中で、この建物を簡単に解体してしまっていいんだろうか。市が購入すればいいという話もあったんですけれども、なかなか市の財政もそういったところには投入できないというところで、かなり難しい問題になっています。

この問題は、今話し合われているわけですけれども、例えばこれ解体して、20 年後、30 年度、僕らの子どもたちが、またさらにその後の世代が、この建物に対して残しておけばよかったんじゃないかという話になってしまうと、ものすごく僕らの責任は重いと思うんですね。

もう一つ紹介したいのが、旧下田小学校、これが明治 22 年に建てられた建物でして、実はこの建物、今いますこの場所に建っていました。この建物はやはり解体されました。今よく言われるのが、この建物を残しておけば、この街中の一等地にこの建物が建っていれば、観光の素材としていかに重要であったかというのがわかると思うんですね。

そういった意味でも南豆製氷所というのは街中の玄関口にある産業遺産である。そういった重要度を考えると、この今の時期に解体に踏み切ってしまっていいんだろうかというふうな問題がありまして、かなり金額的には大きな問題になりますので、市だけではちょっと解決できない問題でして、なかなか発展がないんですけれども、何か県としてお力添え、アイデア等あればお聞かせ願いたいなと思っております。

ちょっと難しい問題で僕もずっとこの問題に対して関われてはいなかったんですけれど

も、もうすぐ解体という危機的な状況にあって、やはりもう１回再検討するべきではないかと思いまして、耳の痛い話かもしれませんが、今日ちょっとここで取り上げさせていただきました。ありがとうございます。

＜発言者３、発言者４に対する知事のコメント＞

まず南伊豆のトップバッターとして発言者３さんからジオクッキーですか、これは大したものですね。大体まんじゅうをつくるんですよね。何とかまんじゅうとか、それで売り込むわけですよ。ただこれクッキーというのはしゃれているじゃないですか。まんじゅうとなると丸いでしょう。ですから丸ければジオサイトを表現できないですよね。ただクッキーだと、クッキーというのは欧米ラインのものでございますから、しゃれていると思うんですが、そこにヒジキだとかアロエですか、それをクッキーに生かされている。地産のものを上手に生かして、そしてそのジオという言葉も売っていくと。それで、腹に入れていくと、頭にも入ってほしいということで、そういう試みをされているのは誠に発言者３さん大したものだと思いますね。これは応援したい。

先ほどの発言者２さんの方からも、キンメダイはともかく伊豆半島の食材についてもうちょっと、あるいは食の都というのはあまり東部の方は熱心でないのを何とかしろというふうに言われたんですが、実はつい最近までそういうことにあまり関心がなかった。食料自給率という話をお聞きになったことがあるでしょう。食料自給率は、日本全体で 40%だと、これを 45 から 50%にしたいと。ところが本県の食料自給率はいくらか御存じですか。カロリーベースにすると 17%ですよ。つまり平均よりはるかに低い。

それはどうしてかというとカロリーベースですから、ワインとか、アロエとか、あるいはお茶とかというとカロリーはほとんどないですから、だからアロエ抜きで、あるいはお茶抜きで、あるいはワサビ抜きで日本の健康を考えられるかというと考えられません。アロエなんていうのは、何か養毛剤にも使われているんじゃないですか。要するに用途がいろいろありますよね。要するにそうしたものが全部無視されてカロリーベースでやっていたんですよ。

これはちょっとおかしいと。カロリー過多で、カロリーを下げねばならない、下げねばならないと言っている大臣さんたちが、カロリーベースでもっと上げろと言っている。本当の健康はカロリーかというと、もちろん最低限のカロリーは必要ですけれども、バランスのいい食事からくるはずだと。つまりいろんなものを少しずつではあっても、いただく

ということを通して健康が維持されるということは、子どものときに、これも食べ、あれも食べなさいというふうにお母さんやお父さんが言うのと一緒です。

そして本県でそういう食材を数えたら何と、海も山もありますから 219 で日本一ですから、食材の王国なわけです。ただいろんなものがたくさんあることの方が、ハンバーグを毎日食べさせてカロリーが足りているよりもはるかに健康にいいことは、もうだれもが体で知っているし、経験上、我々が先人から学んできたことでございます。

そしてそれを上手に使っているレストランがどれぐらいありますかと。２万あるんですよ、静岡県下だけで。そしてそのうち１％でもいいから、こういう地産で使って、そこでおいしい新鮮なものを出しているところを「食の都の仕事人」として表彰しようといったら、１％ですから 200 人の仕事人です。２万に対して１％ですと 200 人。おさまり切らなくて 260 幾人の仕事人になっているわけです。

これは自薦他薦ですが、例えば昨日「君知るやところは伊豆の多賀の里」という多賀のそば屋では、そんなのは知りませんとおっしゃっている。こちらの人に十分に知られていないので、もっと広報していこうということになっております。

しかしキンメダイだけでなくて、いろいろな食材をこちらに来て食べていただくというふうにするのがいい。東京の連中が静岡の食材を使って高く売っているんだったら、こちらに来て食べていただくようにした方がいいと思います。

そうした中で新鮮な１次産品、それからそれを上手に加工してクッキーにすると、これはお茶にも合うし、ちょっとしたお菓子として子供たちも楽しめるしということで、こういう食材を大事にするということが実は自然を大事にするということにつながっていくと。自分で作ってみよう。作ってみると材料をどこから手に入れるかということになっていきます。給食にも地産地消をやっていく。地消が大事です、この土地で消費する、ここを大事にしていただきたいと思います。

さて、今度は下田のまだ 33 歳という発言者４さん、非常に歯切れのいい方で、『下田遊戯』はもう 32 号、８年で 32 号ということですから、１年に４回ということですね。１年に４回というと春夏秋冬ということです。これも格好よく「オータム」と書いてあります。32 号はオータム、31 号はサマー、当然 30 号はスプリング、29 号はウィンター、つまり春夏秋冬でやっているのがいい。なぜかというと、春夏秋冬でたたずまいが違います。春のよさ、夏のよさ、また冬のよさ、これがあります。

そして冬といっても、こちら１月にはイタリア桜が熱海に咲いて、河津桜が２月、河津

を中心に南伊豆全体、賀茂地域全体に河津桜が咲きますね。「頃は如月」でしょう、「君知るや頃は如月伊豆の里河津桜の花の盛りを」こう言うじゃないですか。だから如月、２月に咲くという。ですからそういう季節というものを大事にするというこういう雑誌だから、やっぱりそれぞれに特色があるものができているんだと思います。

そしてこのパンフレットですか、これは竜馬だとか吉田松陰だとかありまして、いわゆる何でもありの詰め込みに対して反対でやっている、非常にユニークな試みをされている。

そういうユニークな目を持った方が、南豆製氷所を残したらどうかと言われている、伊豆石で造られている。新しいものは造れます、幾らでも。古いものは壊してしまうと造れないですね。だからなぜ古いものを大事にするかということは、新しいものは造り変えることができる。アメリカは新しいものを造る以外にないんですよ。アメリカに６世紀のもの、７世紀のものを求めても不可能です。しかし法隆寺は１回焼けたとはいえ７世紀のものが残っている。ずっと修復しつつ残してきたということで、日本で最初の、あるいは世界で最も古い木造建築として、一発で世界文化遺産になりましたでしょう。ですから古いものというのは、特に地産で造られているものというのは大事にした方がいいということは一般論として言えますね。

例えば岡山に昔紡績工場がありました。もう紡績は繊維産業でどんどんと香港の香港シャツだとか、アジアのいろいろな繊維産業でやられちゃって、もう工場も潰そうということになったんですよ。ところがその工場のレンガ造りの女工さんが働いていた建物を外観だけ残して、中をホテルにしたわけです。そのレンガに蔦をからませたわけです。蔦のからまるチャペルじゃないですけれども、何となくレンガというとイギリスを思い出すとか、ヨーロッパを思い出すとかということで、外はそのままで中をホテルに変えたら、そこがばか当たりしましたね。

あるいは小樽に倉庫群があります。その倉庫群は倉庫として使っていたんですけれども、今それは誘客のための運河と倉庫の景観で中を変えた。それからまた函館もそうですね。あそこにレンガ造りのいろんなものがあった。これを全く中身を違うものに変えて、カフェにしたり、あるいは食堂にしたりした。下田には私も何度となく通っているので、あっこれかというふうに今写真を見せていただいて思いましたけれども、そうした観点で、せっかく古いものがある、特にこの建物それ自体はすばらしいと思います。

しかし下田小学校がなくなったのも惜しい。ただ、ここにあったからここに残せということでなくても、よく移設をして、そこで残すというやり方がありますよね。ですから知

恵を絞って、せっかくいわゆる伊豆石というのは江戸城との関わりは非常に深うございますし、それで造られた近代的な建築、1920 年、大正期で、ちょうど関東大震災のときじゃないですか。そうしたときに造られた南豆製氷所だということであれば、確かに今発言者４さんがおっしゃったような問題提起は正面から受け止めてみると。今の冒頭の御発言からすると、相当これは議論がなされて、かんかんがくがくの議論があって割れているようですね。そういう感じがいたします。これについてはもう決まっているんだというような目線も返ってきておりますが、しかし古いものというのは新しく造ることはできない。それを修復して残すということを通して財産が増えるという面があるということは、一般論として正しいというふうに思います。

＜発言者５＞

皆さん、こんにちは。私は「遊・ＶＩＶＡ！」ネットワークという子供と親子連れの居場所づくり活動をしているボランティアグループの代表です。

そもそも何でこういう活動をするようになったかというと、自分の子どもが小さいときに、下田には豊かな自然がたくさんありますけれども、子どもたちがそこで遊んでいるかというと、なかなか今交通事情とかいろいろなことで遊んでいない。また雨が降ったときとか、お休みの日とかに子どもたちが集える安全な場所が一つも下田にはないということで、そういうところが欲しい。そういう思いから市にも要望したりしたんですけれども、場所がなかったり、お金の問題とかもありまして、なかなか要望が実現は難しそうだったので、じゃあどうしよう。でもできることをしていかないと、子どもたちはどんどん大きくなっちゃうよということで、同じような思いをしている親たちが集まって活動が始まりました。

きっかけとなったのは県の子どもを育む推進事業ということで、その援助をいただいて最初は始めたんですけれども、今は月に１回、各地の公民館とか小学校の体育館、そういったところをお借りして、いろいろな遊具を持っていって、そこで自由に遊んでもいいし、宿題をしてもいい。また小さい子を連れたお母さんたちが来て、そこでお茶を飲みながらお話をして友達を作ってくれてもいいし、お昼寝に来てもいい。またおばあちゃんたちが来て子どもたちと遊んでもらってもいいですよというそういう場づくりの活動をしています。

今年で９年目になりますが、最初下田市の総合計画の三次計画の中には児童館の建設と

いうことがあったんですが、去年決まった四次計画からは、その児童館の建設ということはなくなりました。それはなぜかというと、下田の新しい市役所を建てるという大きな事業があるので、児童館というところまではとても手が回らないよというようなことなんですね。

でも、私たちとすると、やっぱり子どもたちは学校と家庭以外に地域の中に子どもたちを育てるそういう場所、いろいろな年齢の人たちと子どもたちが関わって、それで遊びの中で子どもたちがいろいろと覚えることというのはあると思うんですね。そういうことがすごく大事だと思うんです。だからそういう場所をぜひ行政が作ってもらえるようにということで、今もお願いしていまして、ちょうど昨日市長とお話しする機会があって、そのことを改めてお願いしたんです。

私たちが活動をし始めた９年前から今日までの間に、下田市の子育て支援といいますか、私も全部を知っているわけでは決してないんですけれども、「遊・ＶＩＶＡ！」の活動をしている中で子育て支援に関わってきて、９年前から比べるととっても進んできたと思います。私たちが活動し始めたころは「子育て支援」なんていう言葉は何かあまり耳慣れないような状態だったと思います。

でも３年前でしたか、市役所の子育てに関係する福祉事務所さん、教育委員会、健康増進課の方たちと、あと社会福祉協議会、そしてまた私たちのようなボランティアが一つの会議、ネットワークという「下田子育てネットワーク会議」というのを作るようになりまして、ボランティアだけではできないこと、そしてまた行政だけではできないこと、そういうことがあるけれども、それぞれができることを持ち寄って何かやろうよということで、それから本当にいろいろな子育てガイドブックを作ったりだとか、今年はファミリーサポートセンターもできましたし、去年は子育て支援センターというのもできてきました。ですから働くお母さんたちも安心して働けるようないろいろな土壌がだんだんできてきたと思うんですけれども、こと児童館に関して言いますと、さっきもお話ししたように、全然どうかなって、実現の目途はないわけですね。

それで私たちも９年活動してきた中で、一緒にやってきたメンバーの子どもが大きくなって、親も働くようになりますね。働き始めると、やっぱり活動に、当日でもみんな来てくれるので、月に１回の活動はおかげさまで続いているんですけれども、話し合いとかそういうものに対して、スタッフがだんだん時間的に来ることができなくなっちゃったとか、親の介護が始まったりだとか、いろいろなそういう状況があって、このままボランティア

として活動が続けていけるのかというところでは、非常に不安なところがあります。

ですからやっぱりここは行政にちゃんと児童館というものを整備していただいて、でも児童館ができればそれで終わりなわけじゃなくて、そこからまた始まるわけですから、何というのかな、下田で子育てしてよかったなって思えるようなそういう環境を作れるようにしてほしいなというのが今の願いです。ですから、昨日市長にもよくお願いしましたので、ここで知事さんのいらっしゃるところで、下田の児童館がどんなふうになるか見ていていただけたらと思います。

あと３つ簡単にお話があります。１つ目は下田高校のことなんですけれども、下田高校というのは４年前にできた高校で、南高と北高が一緒になった高校です。下田にはそんなにたくさん高校はない。稲取とか松崎とか、ちょっと交通費をかければ行けるところはありますけれども、下田の人間とすると、やっぱり下田高校しか自分の家から通える高校というのはないわけですね。

そうすると、やっぱりいろいろな子どもたちがいて、もちろん大学に行きたい子もいれば、何か自分のなりたい仕事をという夢を持っている子もいれば、また全然何も決まっていない子もいる。だけど、社会に出る前に、やっぱり高校のときに自分がどうやって生きていくか。やっぱり私としては一人でごはんを食べて生きていける人間に育ってほしいなって思うわけです。そうすると、その高校が何か今ちょっと進学に傾いているんじゃないのかなっていうような感じがあって、もっと広い総合的な子どもたちのそれぞれの芽を伸ばせるような内容のものになってもらえたらなっていうのが１つ目の願いです。

それから２つ目が原発のことです。これは県民投票が否決されてしまったんですけれども、一人の母親としての願いは、本当に多少の不便をしても安全が欲しいということです。これからどうなっていくのかわかりませんけれども、県民投票は県の人たちがどうするかということを知る一つの大きなチャンスだったと思うんですけれども、その意見を聴くということを議会が否決したわけですから、これからどういうふうにしていくかというのは、ちゃんと私たちは見ていかなくてはいけないと思いますし、原発を造らないことに決めたデンマークの人が言っていたんですけれども、50 年先の未来に対して私たちは歴史的な責任があるというような言葉がありました。だから安全ということを考えると、本当に 100％安全ということはないんだという立場の中で考えて、エネルギーを選んでほしいなというのが２つ目です。

それから最後、私は農産物の直売所「旬の里」というお店に勤めています。そこにいま

すと、たくさんの農家の方が地元の農産物を持ってきてくださるんですけれども、その中で最近よく聞くのが、サルとか、シカとか、イノシシとか、そういったものの被害です。明日の朝ミカンを採ろうと思っていて、朝行ったら全部サルにやられていたよ、そういう話をよく聞きます。伊豆新聞でも、今年はイノシシを採るわなの申請が去年までの３倍に増えたというような記事も載っていました。

だんだん農家の方も高齢化してきて、そうやって自分が一生懸命作ったものがサルとかにやられてしまう。それは昔から同じことの繰り返しなんでしょうけれども、やっぱりだんだんそういうことが繰り返されると、ああ、もう作るのはよそうかなって。そうするとせっかく伊豆の農業、今本当に新鮮な野菜がたくさんお店にはあるんですけれども、そういうものがだんだん作られなくなってくるのかなと思うと、もちろん若い人たちも一生懸命やっておられますけれども、そういう人たちを応援する意味でも鳥獣被害のことについて、市もきっと一生懸命やってくださっていると思いますが、県の方でも何か力を貸していただけたらと思います。

＜発言者６＞

皆さん、こんにちは。私は下賀茂熱帯植物園で支配人をしております。よろしくお願いします。

来年「みなみの桜と菜の花祭り」というのも 15 回目の節目を迎えまして、私もそちらの方、立ち上げから携わりまして、何とか土手の河津桜を売っていこうということで、今みんなで頑張っているところです。

今回お話しさせていただきたいのは、ここ最近新聞に出ているやつだなとお思いの方もいらっしゃるかと思いますけれども、今下田と南伊豆、有志で集まりまして、東北に河津桜を植える「伊豆から桜プロジェクト」という活動をやっております。

きっかけとしましては、今年の３月ぐらいにテレビを見てたときに、まだ変わってない東北の姿を見て、昨年僕らも１年目というのはみんな募金一生懸命やりますので、その集まったお金って何に使われたんだろうと、そういった疑問がまず生まれました。やはり１年たつと、あちらこちらで聞かれますけれども、募金の集まりも悪いぞと。

そういう中でせめて下田と南伊豆だけでも一致して、何に使うというものを明確とした募金活動をやらないかと。ちょっとした飲み会のときにほろっと言ったことが、下田のメンバーと南伊豆のメンバーで、じゃこれやりましょうよということで、今年の４月から募

金箱をつくりまして、下田市内、あと南伊豆町内の宿泊施設、飲食店、商店、そういったところ、いろいろなところで、最終的には合計 160 件の場所にこの共同の募金箱を置かせていただきました。チラシが貼られていたので、見たことがあるという方もいらっしゃるかと思います。

我々はこのお金を使って何をしようかといったときには、やはりお金とかではなく、実際にその被災地へ行って、南伊豆、河津町の代表的な河津桜、これを被災地の荒れた土地に植えたらどうだろう、そういう趣旨から始まりまして、桜というものは１年２年で大きくなるものではありません。やはり５年、10 年とか長い期間たってからやっと見ごたえがあるものになるかと思います。

その間、やはり僕らの思いというものも伝わると思いますし、あげた方、相手方の方も、やはり毎年花が咲くたびに、これはどこからもらったんだろうといったときに、延々と南伊豆と下田からもらったんだよという形になるんじゃないかと。宣伝といったら言い方が変ですけれども、やはり形としてずっと残る活動をやりたいと。それに賛同してくれた下田、南伊豆のお店が皆さん協力をしていただきました。

今回、まさに先週なんですけれども、10 月 10 日に我々「伊豆のせんたんコンシェルジェ」というＮＰＯ法人、これも下田と南伊豆の有志で集まったＮＰＯ法人なんですけれども、10 月 10 日に福島市の花見山という桜の名所のところですね、そちらの方から依頼があったものですから、そちらの方に河津桜を 100 本持っていきました。根本が、あげるのではなく、僕らが行って、現地の方と一緒に植えて、それで交流を持ちたい、ここから始まった活動になっております。

それプラス、やはり相手方のＮＰＯさんの方は浪江町ですとか、ああいったところに避難されている方たちの憩いの場としていろいろなことをやっているとお聞きしたので、そういった方にもちょうど下田、南伊豆今が旬の伊勢海老、これは福島県にはない食材だと思いますので、お味噌汁になりますけれども、600 食分ほど持っていって炊き出しという形もやらさせていただきました。

こちらもすべて僕らの参加費、よく誤解されるんですけれども、募金には一切手をつけず、当然ですけれども、すべて手弁当でみんなで行ってまいりました。その数はＮＰＯから 10 名、一般参加者が３名、それと新聞記者さんが同行取材という形で１名入っていただいて、14 名で１泊２日の強行軍で行ってまいりました。

実際に向こうのＮＰＯの方と 100 本のうち 64 本は山に植えました。その山も、このＮＰ

Oの方たちが被災者を使っていろいろ管理されている山でして、そういった方へのアルバイト代もちゃんと支払った中でそういった活動をやられているところです。残りの 40 本は、その花見山というところは、花木農家の集合体というか、かなり有名なところなんですけれども、その農家の人たちに管理していただきたいということでお渡ししております。

こちらの花見山というところも、ピーク時ですと桜の名所ですので、40 万人ぐらい人が来ていたらしいんですけれども、昨年の震災でゼロになり、今年ちょっと戻ったとはいえ 10 万人。やはり福島の方とお話をさせていただくとすごく感じるのが震災の爪あと、一番はやはり原発だそうです。ですからボランティアが昨年から、10 あるとしたら８から９は宮城、あとは岩手に行っちゃうそうです。やはりボランティアの方もそこまでリスクをという中で、もう福島に来てくれないんですよと、こういう声も聞いていたので、僕らは何としてもここでやろうということでやらさせていただきました。

参加したみんなも、やっぱりそこまで真剣にというか、どんな感じかもわからないまま行ったんですけれども、みんな声をそろえて、すごく貴重な経験ができたと喜んでもらっています。これもひとえに募金箱を置いてくれた店主の皆様ですとか、それに小銭を入れてくれた市民町民の皆様、みんなの善意だと、相手方にも伝えております。あくまでも僕らが行ったのは、その皆さんの思いを込めてお伝えしています。

いずれ伊豆半島も、特に下田、南伊豆、津波想定が非常に高い数値が出ております。今の僕らにできることをやって、何しろいろんなところと交流を深めたいと。その中でこちらに何かあったときには、やはり助けに真っ先に来てくれるだろうと、それはわからないですけれども、そういったこともいろいろ踏まえたときに、この河津桜を植えようということになりました。

これには敵に塩を送るみたいなことを言われたときもありましたし、いろいろありましたけれども、我々の考えとしては河津桜、東北で植える分には、恐らくこの南伊豆、河津とは時期がかぶらず、ずれていくんじゃないかと。向こうは恐らく３月中旬とか、それぐらい以降じゃないのかなと。うまくすれば 3.11 の追悼の日に唯一咲く桜となっていただければ、より南伊豆、河津の桜が有名になるんじゃないのかなという思いもありました。

翌日には、旅行会社を回る班と、あと被災地を見に行くという班に分かれました。私は観光チームだったので行ってないんですけれども、行った視察チームの方に聞きますと、行ったところは南相馬市の小高地区というところで、原発 30 キロ圏内に入っていて解除になったばかりのところらしいです。

みんなから言われた言葉が「死のまち」だったと。実際人が入っていいんですけれど、住んでいる人は一人もいないと。さらにまだ水道なんかも通ってなくて、ライフラインもできていないそうです。それで車２台、伊豆ナンバーで行ったところ、車が止められたそうです、追っかけられて。言われた一言が「おまえら何しに来た」と、何かなと思ったら、泥棒と間違えられたらしいです。それぐらい治安が悪いそうです。住民はほとんどこちらに戻っていなくて、別のＮＰＯが管理みたいな形でやっているそうです。

それでやはりその行ったメンバーも全員意識が変わりまして、これはもうこの活動はやっぱり僕らもできる範囲で毎年続けていこうということで、みんなこれから反省会をまた開いて、正式なことはやるんですけれども、何が言いたいかといいますと、やはり伊豆半島、特に下田と南伊豆というのは民間レベルがどんどんくっついています。

やはり同じことを同じ目的でやっていけば、マンパワーがどうしても足りない分、カバーできると思いますので、この募金活動も 11 月ごろからまた始まりますし、先ほどの発言者４さんの『下田的遊戯』の裏面にも掲載されて、皆さんの御協力でできている事業となっていますので、また我々の募金活動に、ぜひ御協力いただきたいなと思っております。

＜発言者５、発言者６に対する知事のコメント＞

まず発言者５さんの児童館の件ですけれども、今日は子どものためということでお話しなさっていますけれども、言葉の端々に表れていますように、お母様方のためでもあるんですね。ここはとても大事なことで、子育て支援、もちろんお子様たちが児童館で遊ぶということが大事ですが、そこに保護者が来られると。そこで情報交換すると。そして子育ての苦労話、あるいは相談事、あるいは経験をそれぞれが共有するということを通して、子どもを育てやすい環境を母親同士で作っていくという、ここは幾ら強調しても足りないと。

今一人っ子で生まれて結婚して、そして子どもが生まれて、子どもの育て方がわからなくて苦労して悩んでいるという若いお母さんがいらっしゃるのです。ですから、子育てを実際にやって、ある程度の子どもが幼稚園や小学校に行くようになったとか、あるいはもう子育てを十分に経験して、そしてお母さん経験者として、その経験を若いお母さんに伝えるということを通して子育ての支援をする。

今人口がどんどん減っています。静岡の人口は３年前には、380 万と言っていたわけですが、今は 10 万未満を四捨五入すると 370 万なんですよ。２年前の４月で 377 万 6000 人と

いうちょうど富士山の高さを思わせるということで、3776 でよかったんですけれども、今は 373 万数千人です。ですからこれは困ったというふうに思っています。お子様を支援するために、お母様を育てやすい環境にしていくということにはいろいろな方法があると思いますけれども、注目して見ていろと言われたので、注目して見るということをお誓い申し上げます。

それから高等学校は勉強もしなくちゃいけない。しかしスポーツもしなくちゃいけない、それからまた芸術も大事ですわね。ノーベル賞を受賞した山中先生もスポーツをやっていましたよね、非常にたくましい。それでよくケガをするので、ケガしたのを治してくれる外科医になりたいということで、しかし外科手術には自分の手が余り器用じゃないということで、それで基礎研究に行かれたということなんですが、やっぱりスポーツからきているわけですね。たくましい。そしてスポーツでケガをした子ども、あるいは同じような人を治したいという、こういうところがあったので、スポーツも大事だということです。

それから今日は朝日小学校で５年生、６年生の子どもたちが歌を歌ってくれましたけれども、二重唱です。低音と高音で和声をつくってハーモニーをつくって歌ってくれた。これも感動します。もう文句なしに感動するということで、こういう芸術を愛するということが大事です。

特にこの伊豆半島は、一番最初に『伊豆序説』で川端康成さんはポエムの「詩」、それを「うた」と読ませて「伊豆は詩（うた）の国である」と、こう言っているわけです。２番目に「伊豆は日本歴史の縮図である」。まず最初に「詩（うた)」がくるんですね。そういうことで、そういう芸術も大事です。ですから心の栄養といいますか、３つとも大事で、学歴偏重だけで済むと思ったら間違いだと。だから昔は文武両道と言いましたけれども、芸術も、また芸術の秋ですから文武芸三道鼎立、文というのは学問することです。これはやっぱり勉強するということはとても大事です。

一生勉強、生涯学習という言葉は静岡県から生まれました。掛川から出て、生涯学習という言葉を日本中で知らない人はいません。一生勉強だと。何事につけ、別に本を読むことではありません。魚市場で働きながら、あるいは公務員をしながら、人にサービスするにはどうしたらいいかを考える。いろいろとその場で学ぶという姿勢を失わないという生涯の学習だということでございます。

そしてやっぱり体を作っていかないといけない。日本一の健康寿命になりましたが、健康寿命になった一番の理由は食材が豊富でお茶をよく飲むと、これは『週刊ポスト』７月

２日号で大々的に知られましたね。なぜ静岡県は日本一なのか。これは食材が豊富でいろんな、219 品目と書いていましたよ、週刊誌で。よく調べたなと思って。そしてお茶を人一倍飲まれると、これが静岡県が健康寿命日本一だ。

本県は平成 11 年ぐらいから高齢者を中心に調査をしておりまして、そこで長生きをする人と早く亡くなられる方を見ていくと、長生きされている方は食材、食事をちゃんと注意されているということに加えて運動しているんですよ。もう一つあります。社会参加なんです。つまり家に引きこもってじっとしている人よりも、何だかんだでまちの活動に携わったり、あるいは趣味で囲碁をやったり、あるいは何かお友達と集まって社会参加をしている。この３つ揃うと、食事、それから運動、それから社会参加、つまり閉じこもりにならないということ、これらの人たちが平成 10 年から見ると断然長生きしているという、これは数字でわかっているので、ここをもっと大事にしようということで、そうしますと、学校で勉強できるだけということよりも、ほかのことも大事だと。

やっぱり数学が一番できる子も、陸上の 200 メートル、100 メートルで中学校新記録を出す子も大事だと。それからもうここは詩（うた）の国ですから、芸術を大事にする、全部大事だということなので、学歴偏重だけになっているとすれば、これは問題です。しかし学問も大事ということは改めて言わなくちゃならないということです。

それから原発の住民投票は、あれは原発の反対の署名ではなかったんですよ。再稼働の是非について条例を設置するということについての署名ですから。条例を設置してくださいという署名です。その条例が不備であったから否決された。だから今条例がいいのができましたから。前のやつは全議員が否定しました、こんなものは実行できないからと。こんな条例を設置してくれと言われても、この条例じゃ設置しても設置した途端にできないということがわかるので天下に恥をさらす。今度それを逐一汗を流して決められ、結果的に大分中身が違うものになったので、この条例を設置してくれと言われたものとは大分違うものだからということで否決された。だから、今度はいい条例案ができていますから、修正案見てくださいませ。

ただ実施可能と言っても大きな問題がある。それは投票するという投票行動は県ができないんですよ。全部市町がします。こちらですと楠山市長や鈴木町長だけじゃなくて、市議会、町議会でこれは協力しますと言ってくださらないとできないんです。そういう制度になっているんです。ですから中央政府の方にも働きかけて、これを住民投票しますというように県が決めたとすれば、いわゆる普通の選挙と同じように市町の方で御協力をいた

だけるというようなことを国としてお決めくださいませんかということを今働きかけつつあります。だから終わったわけじゃありません。

今、発言者５さんの方から、何か原発の反対を言いたかったというそのことのための条例だと思われている。違います。条例を設置するための署名だったんです。その条例が不備だった。だから否決された。一人の賛成者もいませんでした。実行できない条例案を設置してくれと言われたって、だめだと言うのは当たり前です。また、実行できる修正条例案ができたけど、それは最初の皆様方が署名されたものとは大分違ったので、だから違っているものに皆様方は署名されたわけじゃないからという理由で、ちょっと屁理屈的ではありますけれども、そういう屁理屈をつけられて、否決された。終わったわけじゃありません。これからです。ですからそんな悲観しちゃだめですよ。一つ一つ乗り越えていなくちゃいけないということです。

それから、サル、シカ、イノシシ、最近シカは特にきついんですよ。今一生懸命やっています。１頭１頭射殺して、ポイントはすみ分けをしなくちゃいけないと。野生の生物と人間とは長いことすみ分けていました。それが人間生活の本来出てきてはいけないところに出てくるようになって、あっという間に数が増えて、そして自然保護というよりも、本当は緊張関係が、サルはサルの世界、シカはシカの世界、クマはクマの世界で、里に出てきちゃいけないという、いわば人間界と生物界のルールみたいなものが今いい加減になっています。

射殺するとあっという間に腐るでしょう。重たいでしょう。それを処理するのに時間がかかるので、ですからわなを仕掛けて、集団的に一気に追い込んで、そこで管理するというのが一番いい。適正なシカの数、サルの数、なかんずくシカですね。これは富士山の麓、あるいは天竜川の上流でも、静岡県下全体、山梨県も長野県も日本中で大問題です。伊豆半島で厳しいことも知っております。ですから今もう県議会でこれが問題にならないことは一度もないぐらいです。

私は自衛隊に頼みました。「あなた方、人間と戦っているよりも動物の方が簡単でしょう、追い込んでくれ」と。そしたらできないと言うんですよ。武器持たないでやってくれ。訓練でやってくれ。できないと言う。またボランティアでやってくれる人も少なくなって、それで仕様がないからいろいろな方法を考えながら、各地で取り組んでおります。十分な成果が出ていないことで申し訳なく存じます。

それから発言者６さん、いいことしてますね。もう感心しましたよ。しかも南伊豆と下

田の仲間たちで河津桜を福島の花見山にというのはいい。大体、桜と言えばソメイヨシノだったでしょう。ソメイヨシノといったって、これは 300 年の歴史しかないですよ。桜は平安時代からずっと歌に歌われているわけでございます。ソメイヨシノが桜だと誤解しているところがある。ソメイヨシノの染井というのは東京の今は何区ですかね、杉並区か豊島区か、あの辺の地名ですよね。河津桜で全国を制覇しようというくらいの何か志を感じましたね。

しかも、もちろんその被災者に春の訪れを知らせたいと。こちらは１月末から２月ぐらいに花が咲く。向こうは当然桜前線、だんだんと北上していきますから、当然開花が遅れるということですから、ここは暖かいから。私は河津桜を九州で植えているというのは聞いたことないんですが、ここを原点にして河津桜前線はここから上っていく。それで３月 11 日に咲けばいい。泣けてくるじゃないですか。ほぼひと月ちょっと後に上に上がっていくと。そのときにみんな励ましてくれるというんですから、これはいいですね。それも向こうのボランティアの人と一緒にやっているということで、さすが花も伊豆半島だと。

伊豆半島は生態系が豊かですから、その花で励ますというそれがいいと思うのです。向こうに 100 本持っていかれたということですけれども、これが美しい花を咲かせて、河津桜が東北に春を告げると、最初の春を告げるというそういうニュースが全国ニュースで流れるというのを心待ちにしたいと思います。

＜傍聴者１＞

今私たちの地域で問題となっているのは、伊豆縦貫自動車道のルート帯がどこに決まるかということです。私たちの住んでいる地域は、民家はもちろんですが、保育園、小中高等学校に通っている子供たちが 1,400 人もいるんです。このようなところに高速道路ができるということはいかがなものかと疑問を感じています。17 年前の阪神・淡路大震災、昨年３月 11 日の東日本大震災、そして今心配されている南海トラフ巨大地震と、自然災害はますます巨大化しております。

これからは人が住んでいる頭上に高速道路を造ることなど、とんでもないことだと思っています。既に９月 10 日、１カ月前ぐらいですか、県知事、下田市長宛てにルート帯変更の要望書と署名が提出されています。どうか住民の切実な思いを受けとめて、良識ある御判断をお願いしたいと思っています。

＜傍聴者２＞

ちょっとお願いがございます。先ほど冒頭で国道 135 号のオレンジライン、あるいは 136 号の富士ビューラインの話が出ておりました。大変にすばらしい発想だと思いますが、これを実現するために今県はどんな実行手段をとられているのかをお聞きしたい。例えば担当者を作ってあるとか、何年間でこれを実現できるような仕事をしろとか。

それからジオパークの問題もそうだと思うんですけれども、これの世界認定を受けるために、おまえは県庁の中でこれだけはやれと、そういう担当部局といいますか、係といいますか、それを作って、それが達成できるまで配置転換はしないと。知事ももう１期、あと４年 10 か月ほど知事をやって、それを見届けて、やれやれということにしていただきたいと。ぜひもう一度静岡県知事を続けて、今のようなお話を実行できるように頑張っていただけないかなとお願い申し上げます。

＜傍聴者３＞

今日はせっかくの機会ですから、知事さんに一つお願いしたいと思います。私は平成９年に西伊豆町の騒音問題について県の調停委員会を開催していただきまして調印しました。県の職員の皆様には大変骨を折ってもらいましたけれども、まだ完全履行までには至っておりません。何としてでもこの問題で困っておりますものですから、関係部局によろしく御指導のほどをお願いしたいと思います。

＜傍聴者１、傍聴者２、傍聴者３に対する知事のコメント＞

まず伊豆縦貫自動車道ですね。私は伊豆縦貫自動車道路は伊豆の方々の悲願だというふうに認識してまいりました。そしてこれの１日も早い完成をというその陳情といいますか、ものすごい圧力を受けております。県知事になりまして、私は大仁と宇佐美の間にトンネルを通すことが大事だと思っていたんですけれども、もう伊豆縦貫に比べると二の次、三の次だというふうに言われました。これが背骨だと。

そこから南、あるいは西、東に降りていけるということで、このルートについては恐らく、もう 30 年近く、つまり平成以前のときから議論があるはずで、このルートについて、恐らく今小学校とか保育園とか学校のその真上を通るなんていうのは論外で、ルートについては十分に地元の理解を得た上でやっているに違いないと思っていました。

今回の東日本大震災で全く傷まなかった道路があります。それは東北自動車道と、それからその横に国道４号というのがあります。ここのところ、もちろん地震のためにやられたかどうかチェックしたんですよ。そうしたら立派な道路だということで、それは大丈夫だと１日でわかりました。北上川という川がありまして、東北のど真ん中を流れているんですが、そこから三陸に向けて幾つもの小さな道があって、そこをわあっとがれきを撤去していって、ようやく被災地にたどり着いた。しかしその道路がなかったら、助かる人も助からなかったという。

ところが伊豆半島には残念ながら国道 135 号、136 号で目下のところ海岸線しかないと。そこがもし地震とか津波でやられたとすると孤立しますでしょう。どうして助けたらいいか。414 号だとくねくねして、よく土砂崩れで今でも工事していますけれども、どうしたらいいか。今日は実はその一つで、谷戸川のところを見てきたんですよ。やっぱり一部谷戸川の 10 軒ほどの家に重なっていてまだ了解を得てないということで、どうしたものかと。ここからルートは大まかには決まっていると思いますけれども、下田の方に下りてくると、敷根のところにランプができますね。そういうことは決まっていると思います。県も伊豆半島の方も、それから中央政府もここにもしものことがあったら大変だというので、伊豆縦貫自動車道はなるべく早く造らなくちゃいけないというぐらいに皆注目しているところです。それは人を助けるためです。何万人の人を助けるためです。

そういうことで全体の意味はおわかりいただけたと思いますけれども、それが子どもたちだとか、あるいは学校の先生だとか、あるいは住民の方々の犠牲の上にということになると具合が悪い。そんなことのためにやっているんじゃありませんからね。その声をしっかり私受けとめました。

それから傍聴者２さんが、あれはオレンジ道路じゃないか、富士ビュー道路じゃないかと言われて、確かにオレンジビーチラインだなと思いました。かつてはマーガレットロードですか、マーガレットラインですか、あれラインと言っているでしょう。ラインて何かきれいな感じじゃないですか。道路とロードと言ったらややこしいですよ。ロードは英語でしょう。オレンジロードと言うのか、オレンジ道路と言うのか。オレンジビーチラインは。伊豆スカイラインがあるから。西伊豆スカイラインは山の上を通る。ビーチのそばを通るからビーチライン、スカイにするか、ビーチがいいか、どちらでも選べるというふうにしておいた方がいいと。実はこの名前について、こちらが勝手に決めるわけにいかんということで、地元の方の意見を聞くということが大事だと。愛されなくちゃならないんだ

と。ただゼロからやるよりも、まずアイデアを出して、この案とそれ以外の案がありますかということで、みんなの一番大きく賛同されるものにしようというそういうふうになっておりますので、御安心くださいませ。これは進めます。今はもうどこの集まりでもそれを言っていますから。まずは今お聞きしたところ、どうもどなたも反対をしてないようだということなので、それは実はボールを投げているわけです。勝手に上から押し付けるということがあってはいけないということでございます。

それから傍聴者３さん、現場をまだ見ていませんが、今おっしゃった環境の調停できっちりと申し合わせをしたと。それが守られてないということですね。今僕初めて知りまして、申しわけありません。だけどわかりましたので、すぐにそれを確認いたしまして、なるべく早く傍聴者３さんにお返事を差し上げます。

＜知事まとめ＞

やっぱり２時間というのはすごく長い時間です。しかしながら、今手を挙げられた方もいらして、ほとんどの方がどなたも席を立たれない。寝ている方は一人もいないという、これは尋常ならざる熱心さでございます。そういうことで、今日は６人の方、下田から４人、南伊豆からお２人、聞きまして、それぞれ短くまとめていただき、また私の方からも感想を述べました。またフロアーの方からも３人御意見をいただきました。

まだ不十分だと存じますが、アンケート用紙がありますよね。そこにお名前と、おっしゃりたいことを書き記してください。また、直接言ったときには必ず相手の名前を聞いてください。皆さんのために働いているので、一人一人、課としてではなくて、課長の何某として働いているということですから、そういう形で責任がきっちりと引き受けられて、それが県民の皆さん方へのサービスとして表れるように、そういうふうに努めております。今日御発言なさらなかった方は誠に申しわけなく存じますけれども、また参りますので、つかまえていただいて、皆様方と意見交換ができるような機会があればと存じます。どうも今日は本当に長い間ありがとうございました。